

P-397 肺葉切除を含む複数回の肺切除術を行なった症例の呼吸機能とQOLの検討

近畿大学 医学部 第1外科

廣畑 健, 原 聡, 橋本 幸彦, 大塚 浩史

【背景】近年の肺癌治療の進歩にともない異時性に片側あるいは両側肺に対して肺切除を複数回行なう機会が増えている。しかし、複数回の肺切除術は術後の低肺機能によるQOLの低下を招くおそれがある。このため2回目以降の手術は呼吸機能などを十分考慮し術式を選択する必要があると考えられる。今回は当科において肺葉切除を含む複数回の肺切除術を行なった症例に対し術後の呼吸機能とQOLについて検討した。【方法】当科にて10年間に肺悪性腫瘍に対し肺葉切除を含む複数回の肺切除を行なった11例を検討した。【結果】全例肺悪性腫瘍であり葉切除-葉切除2例, 葉切-部切4例, 葉切-残肺全摘1例, 部切-葉切2例, 全摘-部切2例であった。最終手術後呼吸機能は全例で低下を認め3例は在宅酸素療法を要したが, その他の症例ではQOLの著明な低下は認められなかった。【考察】同側の複数回肺切除と両側肺葉切除において著明な呼吸機能とQOLの低下を認めた。一方同側複数回手術でも最終手術が葉切であればQOLの低下はなく, 両側肺手術でも片側が部切であればQOLの低下はなかった。このことから2回目以降の術式を選択は前回術式を含め呼吸機能, 予定術式を十分検討する必要があると考える。

P-398 肺癌における内視鏡手術検体を用いた組織培養抗腫瘍剤感受性試験

和歌山県立医科大学 第一外科

尾浦 正二, 平井 一成, 吉増 達也, 粉川 庸三, 佐々木 理恵, 谷野 裕一, 櫻井 照久, 岡村 吉隆

【目的】1994年より我々は肺癌化学療法のアプローチ率向上を目的として組織培養法抗腫瘍剤感受性試験(HDRA)を導入した。HDRAは組織採取が必要なため, 内視鏡下手術にて組織採取を行っている。今回, 内視鏡手術検体を用いたHDRAの成績について検討した。【対象および結果】induction therapy 6例, 手術不能19例, 再発1例の計26例にHDRA検体採取目的の内視鏡手術(胸腔鏡6例, 縦隔鏡20例)を施行した。生検組織は原発巣5例, リンパ節20例, 肺転移巣1例であった。6例は生検組織に癌細胞が無く, 20例でHDRAが施行された。検査薬剤はCDDP, FU, ADM, MMC, DOC, VP16, SN38, GEM, PACの9剤より選択, 6 ± 2 (2-9) 剤が検査された。4例は陽性薬剤がなく, 1例は治療拒否, 残り15例で陽性薬剤を用いた化学療法(8例は放射線同時併用)が施行された。治療効果の評価は12例で可能で, PR 11例, NC 1例(奏効率92%)であった。induction therapy例は術後 24 ± 7 ヵ月全例生存, 手術不能例は2生率39%, 中間生存期間23ヵ月(follow-up 16 ± 9 ヵ月)であった。【まとめ】内視鏡手術検体を用いたHDRAは肺癌化学療法のアプローチ率向上に有用と考えられるが, 手術不能例における予後の改善効果は明らかではない。

P-399 熱可逆性ハイドロゲル(TGP)を用いた癌組織片静置培養法による抗腫瘍剤感受性試験

¹浜松医科大学 第一外科, ²沼津市立病院 呼吸器外科

浅野 寿利¹, 鈴木 一也¹, 霜多 広¹, 朝井 克之², 高橋 毅¹, 数井 暉久¹

三次元組織培養法を用いた抗腫瘍剤感受性試験(Histoculture Drug Response Assay: HDRA)の最大の特徴は, 直接コラーゲンスポンジ上で癌組織片を培養するため, 細胞間接触が保持され生体内により近い状態で培養できることである。しかし, 判定の際に癌細胞の増殖が線維芽細胞のそれと区別できないなどの問題がある。またコラーゲンスポンジに固着している培養後の組織を回収するためのコラーゲナーゼ処理を必要とし, 生体内に近い環境を再現できているとは必ずしも言えない。そこで本来, 株化癌細胞や分散化処理を受けた癌細胞の三次元包埋培養に利用されてきた熱可逆性ハイドロゲル(TGP)の上に直接癌組織片を静置培養することで上記の問題を解決した。このTGPを用いた三次元組織培養法は, その特性である線維芽細胞の増殖を抑える働きと生理的温度差のみで細胞の回収操作を行える利点からコラーゲンスポンジを用いたHDRA法よりもさらに簡便で生体内の環境に近い抗腫瘍剤感受性試験の方法であると考えられる。HDRA法とTGPを用いた癌組織片培養法による抗腫瘍剤感受性試験を同一肺癌手術症例において比較検討したので報告する。

P-400 原発性非小細胞肺癌に対する術後UFTの効果-単施設での検討

国立療養所南福岡病院 外科

上田 仁, 坂田 敬, 桑原 元尚, 本廣 昭

【目的】非小細胞肺癌に対する術後アジュバントとしてUFTの効果が, 報告されている。多くは多施設での検討であり, 手術法は同じとはいえない。そこで, 単一施設での検討の結果を報告する。【方法】1997年9月より2001年3月までに当院で完全切除手術がなされた非小細胞肺癌30例を対象に, 年齢, 性別, 術後病期, 扁平上皮癌か否かで層別し, 対象群, UFT群に分け, 無再発期間, 生存期間を検討した。UFT群は, 400mg2年間を目標に内服させた。【成績】対象群は13例, UFT群が17例であった。UFT投与群の投与期間は, 1ヶ月から24ヶ月, 2年内服できたのは4例, 6ヶ月以上内服できたのは12例であった。5例が早期に内服不能となった。食欲不振, 吐き気などが原因であった。無再発率は対象群, UFT群それぞれ5年で53%, 94%であり, 生存率は対象群, UFT群それぞれ5年で59%, 92%であり, UFT群で良い無再発, 生存が得られた。【結論】少数例での検討であるものの非小細胞肺癌に対する術後アジュバントとしてUFTは, 効果があると考えられる。